学問のすすめ

この本のタイトルは、「学問のすすめ」としたけれども、決して字を読むことのみを勧めているのではない。
学問が必要であることの大きな理由を示すため、あらゆる学問の中から、一般の人が心得ておくべき事柄を挙げて、学問とは何かを示したものである。

福澤諭吉は、慶應義塾の他にも、商法講習所(現一橋大学)、神戸商業講習所(現神戸商業高校)、北里柴三郎の「伝染病研究所」(現東京大学医科学研究所)、「土筆ヶ岡養生園」(現東京大学医科学研究所附属病院)の創設にも尽力した。
主な作品：『西洋事情』『学問のすすめ』『文明論之概略』『帝室論』『福翁自伝』『瘠我慢の説』

第 10 編　学問にかかる期待
学問するのには志は高くしなければならない。飯を炊いて風呂を沸かすのも学問である。天下の事を論じるのも学問である。
福澤諭吉はいま学者がその難しいことを避けて簡単な学問に向うよくない傾向があるのではないか。
やむを得ず勉強した上にさらに勉強を重ねた。その学問の方向性は良いものとはいえなかったとはいえ、本を読んでその博識なことは、いま学問をするものがとてもかなわないほどのレベルにあった。
しかし、現在はそうではない。学んだら学んだ分だけ、すぐに使う場所がある。
学校に入って勉強する費用は一年間で百円にすぎない。三年間で三百円の資本を使い、それで一月に五十から七十円の利益を得るというのが、洋学を学ぶ学生の商売である。耳だけの学問で役人となる者に至っては、この三百円の資本金すら要らないのだから、月給はまるまる手取りの利益になる。

感想・考察
苦労して得た学問なら、それが勘定という見地からも保証されていることが分かる。これは現代でもほぼ変わりないことと思うが、それがそうでもなくなってきている部分はあるように思う。需要のある学問と、本当に必要な学問、これらが今問われるべきなのかもしれない。